

東国文化自由研究レポート



研究テーマ

群馬の古墳の出土品から考える！
～埴輪が作られた理由へ

提出日 2024年 8月 26日 (月)



伊勢崎市立四ツ葉学園中等教育学校

1年 4組 21番

氏名

福田 梨子

1. 動機

社会の授業を受けてから教科書を読み返した時、ひとつ気になることがありました。それは、古墳時代でも、古墳からの出土品が古墳時代前期と後期とで大きく分けられることです。

古墳時代はとても長く繁栄していた時代ということは知っていましたが、その中でなぜ変わっていったのかということにはまだ触れられていなかったため、調べたいと思ったからです。

<古墳時代前期・後期の出土品(調べる前の時点)>

前期

・まが玉

・銅鏡

など

後期

・武人埴輪

・鉄製農具

・馬具

・冠と靴

ここから分かることとして、古墳時代後期になってから埴輪が作られるようになっていきます。そこから、埴輪が作られるようになった理由を調べたいと思いました。

2. 研究の予想

①埴輪には、様々な種類があるので、埴輪一つ一つに意味がありそう。

②埴輪が作られるようになったきっかけは、中国や朝鮮半島との貿易などによる交流で伝わってきた文化だからなのではないか。



3. 調査方法

群馬県で出土された埴輪をもとに、調査する。

(以前、テレビで群馬県は古墳時代にとっても栄えていたことの番組をやっていて、国宝になっている埴輪もあるほど有名だと知ったため。)

① かみつけの里博物館に行き、埴輪について学ぶ



② 群馬県立歴史博物館に行き、国宝の展示を見たり、当時の中国や朝鮮との交流について学ぶ



③ インターネットや、歴史の教科書、図書館で借りた本などをもとに、補足の内容を付け足す。

4. 研究

① かみつけの里で埴輪について学ぶ

かみつけの里博物館では、主に、古墳時代中期から後期にかけて出土された埴輪について学びました。古墳時代中期があり、その時代の頃から埴輪が盛んに作られていたことは知らなかったため、知ることができ、とても良かったです。

まず、古墳時代を三つに分けるとこのようになります。

古墳時代前期	3 へ 4 世紀
古墳時代中期	4 世紀末へ 5 世紀
古墳時代後期	5 世紀末へ 6 世紀末

かみつけの里に、古墳時代に出土された埴輪の年表がありました。古墳時代全ての埴輪が作られた時代によって書かれていました。見てみると、古墳時代前期にも、実は埴輪はもうあったそうで、円筒埴輪と言うそうです。

< 4 世紀 >	< 5 世紀 >	< 6 世紀 >
家 (いえ)		
蓋 (きぬかさ)		
盾 (たて)		
	甲冑 (よろい)	太刀 (たち) ・鞍 (くら)
	盾持人 (たてもちびと)	
	武人 (ぶじん)	
	巫女 (みこ)	人物埴輪の登場
	さまざなな人物	
鶏 (にわとり)		
	水鳥 (みずどり)	
	さまざなな動物	
	馬 (うま)	

古墳時代中期にさしかかると同時に、表の中ではたくさんの種類の埴輪たちが生産された事が分かります。そして、この埴輪の登場の仕方についてもっと深く知るために、学芸員の方にお話を聞き、その内容でいくつかの要点をまとめました。

Q. 埴輪はなぜできたのですか？ (私)

A. 古墳時代の約300年間で、古墳の埋葬品は変わっていききました。

初めの頃の埴輪は王の存在を守る役割を意味していたため、王の周りに並べられることが多かったです。この頃にはもう『円筒埴輪』、『家形埴輪』、『器材埴輪』などが登場していました。円筒埴輪は、弥生時代に作られ始めていて、突帯(とったい)の数が多いほど、権力が大きかった事を表しています。

その後、次は王の墓である『古墳』全体を守る役割として古墳の周りに埴輪が並ぶようになりました。それが5世紀後半頃からのことです。この時に登場した埴輪が『人物埴輪』や『動物埴輪』です。これは、人や動物たちを埴輪にすることで、儀式を表現しています。このことから、少しずつ王の権力の象徴の表し方が豊かになっていったという事が分かります。(学芸員の方)

くイメージ>

お供え物や魔よけの道具(円筒埴輪)、死者の魂が宿る家(家形埴輪)、王の権威や神聖な古墳を守る盾(器財埴輪)で王を守る気持ち

↓
人(人物埴輪)や動物(動物埴輪)を形どり、儀式を表して古墳全体を守る気持ちや、動物埴輪を置くことで、「山も海も王様のもの」という意味を表している。

また、その人や動物を使って表す儀式は、一つ一つ「物語」として当時の状況を伺うことができる。



イノシシ狩りの
↓場面



猪形埴輪

大刀形埴輪

たちがたはにわ

翳形埴輪

さしばがたはにわ

鞆形埴輪

ともかたはにわ

(※全て器財埴輪)



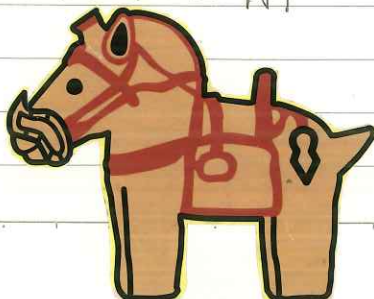
犬形埴輪

また、馬形埴輪は、「馬を持っている王」の権力の象徴で、馬をたくさん持っていれば持っているほど、乗り物をたくさん持っているということになる。そのため、馬形埴輪がたくさん出土されている古墳は、その王が大きな権力を持っていたと解釈できる。

円筒埴輪



赤い部分が「突帯」といいます。



く他にもまだまだある! 埴輪を使った「物語」

これは、かみつけの里博物館の展示内容で、八幡塚古墳はにわ群像模型です。

① 座って行う儀式の場面



埴輪群の中心となる場面です。王が巫女と向かい合い、巫女が王に器を差し出しています。まわりには、王族、琴を弾く人、奉仕する人などがいて、何かの儀式のようすを表現しているようです。

② 王の財産を示す列

最前列の豪華な服装をした人は、王、その古墳の人です。後ろには最先端の技術でつくられた鉄のようい、キラキラした馬具で飾られた馬などが並んでいます。王のもつカヤ財産を見せつけるような場面です。



私の感想

埴輪を使うことで物語を作り、その物語で王の権力を示すということは、王に対する感謝の気持ちや尊敬の念だと思いました。

盛装の王

Q. 埴輪を作る職人のような人はいましたか？

A. はい、いました。

Q. 当時の群馬県に埴輪の職人がいたということは、そのような人たちを増やす育成のようなことをしていたのですか？

A. はい、していました。埴輪を作るのは専門の職人の仕事です。当時、王様のために何かをするという考えがあり、育成させたのは、王がこれだけ埴輪を多く作りせた、という、権力を示すためだと考えられます。そして、職人を養っていたとも考えられています。



＜そこから分かること＞

古墳時代の群馬県は栄えていただけでなく、豪族がとて大きな権力を持っていたということ。

このことを ↓ 踏まえて

Q. 当時の群馬の豪族たちは大きな権力を持っていたことで、作られた埴輪も他の古墳の埴輪と違いますか？

A. そういうことはないです。あくまでも、権力の違いは埴輪の数で決まります。埴輪の数が多ければ多いほど、「埴輪をたくさん作る権力」というものが大きかったためです。

かみつけの里博物館で分かったこと

- ・ 埴輪は実は弥生時代から存在していたこと。
- ・ 古墳時代中期から、埴輪の形は種類が増えたこと。
- ・ 埴輪にはそれぞれ形に意味があり、古墳や王を守る役割を持っている。



②群馬県立歴史博物館に行き、国宝の展示を見たり、当時の中国や朝鮮との交流について学ぶ

群馬県立歴史博物館では、主に、綿貫観音山古墳の出土品や、古墳時代の群馬県の外交について詳しく学びました。

まず、国宝である綿貫観音山古墳の出土品の展示室では、綿貫観音山古墳が国宝になった理由や、出土品の詳しい説明についてなど、様々なことを学びました。

綿貫観音山古墳に埋葬されていたものには、外国（主にアジア）との交流で送られてきた埋葬品もあり、当時の豪族たちが外交をしていたことにおどろき、すごいなと思いました。また、出土品の中には、朝鮮半島から伝わってきたものもあったため、研究の予想の内の一つである、「埴輪が作られるようになったきっかけは、中国や朝鮮半島との貿易などによる交流で伝わってきた文化だからなのではないか。」という考えが本当かどうか知るために、学芸員の方に質問をしました。

Q. 埴輪は他の鉄製の出土品のように、中国や朝鮮半島から伝わってきた、埋葬品の文化ですか？（私）

A. 埴輪は日本独自で作り上げた文化だと考えて良いと思います。あまり中国や朝鮮半島には埴輪に似たものは見つかっていません。（学芸員の方）

その他にも、常設展示室では、当時の群馬県とヤマト王権のつながりが分かる資料を見ました。

<解説> この甲冑は古墳時代にヤマト王権でつくられ、群馬の王に送られたもの。当時は光かがやく立派な甲冑でした。これには朝鮮半島から輸入した鉄や最新技術が使われています。そんな立派な甲冑を送るというのは、ヤマト王権が群馬を信頼し大切にしていたからです。



5. 調査のまとめ

＜研究の予想に対する答え＞

① 埴輪には、様々な種類があるので、埴輪一つ一つに意味がありそう。



結果

全ての埴輪一つ一つに意味がある訳ではないが、埴輪が組み合わせられて新しい意味を作ったり、数の多さで権力の大きさを表したりと、埴輪がある意味はたくさんある。

② 埴輪が作られるようになったきっかけは、中国や朝鮮半島との貿易などによる交流で伝わってきた文化だからなのではないか。



結果

埴輪は実は、日本で作り上げた、独自の文化だった！

6. 研究のまとめ

本当は、古墳時代前期以前から埴輪は存在していたことが分かった。しかし、古墳時代中期にさしかかると同時に、埴輪の存在の意味が変わり、役割も変わったことで、埴輪の種類が増えた。また、埴輪の種類が増える頃より前から、当時の日本は主にアジアの国々と交流を行っていましたが、埴輪が作られる文化が主流になったのは、その交流によってもたらされた文化ではなく、日本が独自に作り上げていった文化だということが分かりました。そして、当時、ヤマト王権と強いつながりを持っていた群馬の豪族たちの権力は大きく、群馬の埴輪の生産量はすごかったということが分かりました。

9. 感想

私は今まで、古墳時代はまだ分からないことが多い、調査の難しい時代だと思っていました。でも今回、このように「東国文化自由研究」を通して、たくさんの学びを得たことで、古墳時代は知れば知るほどおもしろいと感じるようになりました。学芸員の方に直接お話を聞くことで、古墳時代の様子がクローズアップされてとても興味深かったです。更に、群馬県には14000基もの古墳があることを知り、この地に古墳時代の王がいたことを考えると、とてもワクワクしました。埴輪も、1000年以上前に作られたものなのに、こんなにも親みを持つることは、すごいことだと思いました。埴輪を作る専門の職人が育成されていたことも知りましたが、この先も県内外の古墳や埴輪を学べる博物館に行き、見比べて、より深く学んでみたいと思います。

10. 参考文献

- ・かみつけの里博物館
- ・群馬県立歴史博物館
- ・デジタル版「東国文化副読本」 <https://hani-gunma.jp/2021/gunmatougoku/top.html>
- ・興田亜紀子『知られざる古墳ライフ』 誠文堂新光社
- ・石島和夫、若狭徹『HANIー一本』 群馬県